最優秀賞（小学校３・４年生の部）

犬もぼくも同じ命
（課題図書：走れ！メープル　犬の車いすができるまで）【感想文】

下妻市立豊加美小学校　３年　飯嶋（いいじま）　奏太（そうた）

緑のしばふの上を、楽しそうに走る一ぴきの犬の写真からこの本は始まります。ハアハアハァと息づかいが聞こえてきそうです。

その犬の名前はメープル。つい間板ヘルニアという病気で、後ろ足がまひしていて動きません。うんちやおしっこも自分ではできません。歩けなくなったメープルは捨てられました。手じゅつのあとがあることから、かい主はかわいがって世話をしていただろうし、なおしてあげたいと思っていたとぼくは思いたいです。でも、手ばなししてしまいました。かい主もメープルもすごくつらかっただろうと切なくなりました。

この本を読んで、病気で歩けなくなる犬がたくさんいることを知りました。かい主はかいごをしなくてはならず、捨ててしまう人や安楽死させてしまう人もいると分かりました。今までかわいがってきた犬なのにどうして？と、 悲しいぎ問がわいてきます。また、かいごをする大へんさでなやんでいるかい主がたくさんいることも初めて知りました。

メープルのかい主である忠さんは、二十年前にかっていたアドという犬が、メープルと同じ病気になったことがきっかけで、車いすを作ることになります。とつ然病気がわかり、ショックととまどいの中、アドのかいごをしながら、しこうさくごで車いすを完せいさせます。何よりアドにもう一度走ってほしいと言う願いから。完せいした車いすで、アドはタッタタッタと元気に走り出しました。忠さんは、アドの走る姿を見て、感げきします。そして、車いすの材りょうや作り方をホームページを通して発信していくのです。

ぼくは、ホームページを開いてみました。そこには、今までに車いすをとどけた犬たちの動画や写真、名前までしょうかいされていました。一台ごとにとどけけ先に犬を思いながらていねいに作っていることが伝わってきました。こまっている犬のことも、かい主の気持ちも分かる忠さんだからこそ作れる車いすなんだと感じました。車いすを手にいれた犬たちは、みんなえ顔で忠さんに「ありがとう」と言ってるだろうとぼくもえ顔になりました。

車いすをひつようとする犬は多く、病気や事故のリハビリのほかに、じゅ命がのびてろう犬かいごのために使う犬もいるそうです。忠さんの車いすは、作って、ためして、かいりょうしてくり返して進化し続けています。犬とかい主のえ顔のために、緑にかこまれた工ぼうで、やさしさいっぱいの車いすを作っている忠さんは、とてもかっこよく見えます。

忠さんに教えてもらいました。犬もぼくも、命は同じだということを。ぼくには、けがをしたり病気をしたりしたとき、そばではげましてくれる家ぞくがいます。犬だって、からだに合う車いすがあると知っていたら心強いと思います。だから、生き物の命にやさしくよりそって生活していきたいです。

今日メープルは、元気に走っているかな。「メープル、忠さんに出会えてよかったね。」